令和８年度 徳之島町海外語学留学実施報告書

～離島から世界へ、自律する次世代のエージェンシー育成と地域価値の再発見～

報告者：徳之島町教育委員会

主幹兼指導主事　森 迪直

編集年月：令和８年９月

目 次

第１章：事業の背景と目的 ～自立へ向けた手放しと信頼の教育～ 4

第２章：研修プログラムの構成と多層的学習環境 5

第３章：データで見る生徒の心理的変容と主体性発達のダイナミクス 6

第４章：18 日間の活動詳報（第 4 日～第 5 日）：語学学校開校と初めてのセルフオーダー 8

第４章：18 日間の活動詳報（第 6 日～第 7 日）：名門校 JPC 体験入学と歴史遺産の探訪 9

第４章：18 日間の活動詳報（第 8 日）：アボリジニ文化の探究と郷土紹介の準備 10

第４章：18 日間の活動詳報（第 9 日）：生徒主導の市内自主研修と最初の内省 11

第４章：18 日間の活動詳報（第 10 日）：ゴールドコースト長距離移動と本場のテーマパーク 12

第４章：18 日間の活動詳報（第 11 日）：バス大幅遅延トラブルの自律解決と英語プレゼン 13

第４章：18 日間の活動詳報（第 12 日）：恐怖から大歓喜へ！ブリスベン川カヤック体験 14

第４章：18 日間の活動詳報（第 13 日）：現地エリート校化学実験と技術・文化差異の分析 15

第４章：18 日間の活動詳報（第 14 日）：州立科学博物館ミッションと多国間言語交換 16

第４章：18 日間の活動詳報（第 15 日～第 18 日）：涙の卒業セレモニーと帰国の途 17

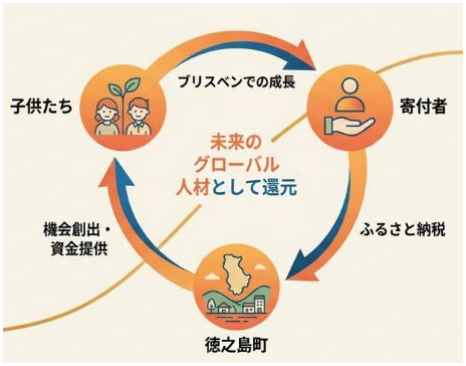
第５章：エージェンシー（主体性）の覚醒と自己効力感の変容分析 18

第６章：直接体験による「郷土愛（ローカル・アイデンティティ）」の逆照射 19

第７章：次世代リーダーを育成するグローバル教育モデル 20

はじめに：ふるさと投資が拓く次世代の未来

徳之島町の町民の皆様、そして全国から本町を応援し、あたたかい「ふるさと納税」をお寄せいただきました寄付者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。皆様からお預かりした大切な財源は、本町における教育環境の向上、ならびに次世代を担うリーダーの育成へと戦略的に投資されています。その結実として実施されたのが、今回で 4 回目を迎える「海外語学留学事業」です。





本土から地理的に距離のある離島という環境は、時に豊かな自然や伝統文化という素晴らしい恩恵をもたらす一方で、情報や国際交流の機会においては、都市部との間に物理的な格差（教育格差）を生む要因となってきました。本町教育委員会では、このような制約に子供たちが縛られることなく、世界水準の教育機会と直接的な体験を得られるよう、本事業を強力に推進してまいりました。

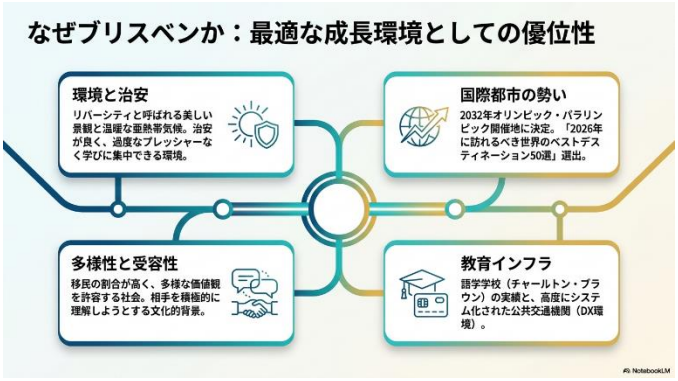
昨今の不安定な世界情勢を鑑み、また離島の子供たちにとってより安全かつ効果的に語学や国際協働を学べる環境を総合的に検討した結果、本年度は研修地をそれまでのアメリカ・ニューヨークから、オーストラリアのクイーンズランド州ブリスベンへと全面的に変更いたしました。

ブリスベンは治安や公共インフラの安全性が極めて高く、2032 年のオリンピック・パラリンピック開催地としても注目を集める、今まさに最注目のグローバル先進都市です。この地で子供たちが経験した 18 日間の全記録を、以下に詳細にご報告いたします。



第１章：事業の背景と目的 ～自立へ向けた手放しと信頼の教育～

グローバル化が極限まで進む現代社会において、子供たちに必要なのは、単なる『知識のインプット』や『試験的な語学力の向上』にとどまりません。未知の環境においても自ら考え、判断し、多様な他者と協働しながら困難を乗り越える力、すなわち『エージェンシー[1]（主体的な行動変容力）』が強く求められています。



従来のパッケージ型海外研修プログラムでは、安全管理の名のもとに引率者が常に生徒に同伴し、移動から食事、トラブル解決までを先回りして手助けする『過剰包摂[2]（過保護な体制）』に陥りがちでした。このような過剰なケアのもとでは、生徒は受動的な『観光客』に終始してしまい、自律的な成長の機会が阻害されるという強い懸念がありました。

そこで本年度の語学留学では、生徒たちの潜在能力を信じ、大人が意図的に指導の手を離す『手放しと信頼の教育』を重点としました。あえて過剰な付き添いを排し、生活に必要なアプリを自律的に活用させ、ホストファミリーとの摩擦も自分自身の言葉で解決させる。この『信頼と手放しの教育デザイン』が、子供たちの野生的な知性と主体的な課題解決力をいかに呼び覚ましたのかを検証することが、本報告書の最大の目的です。



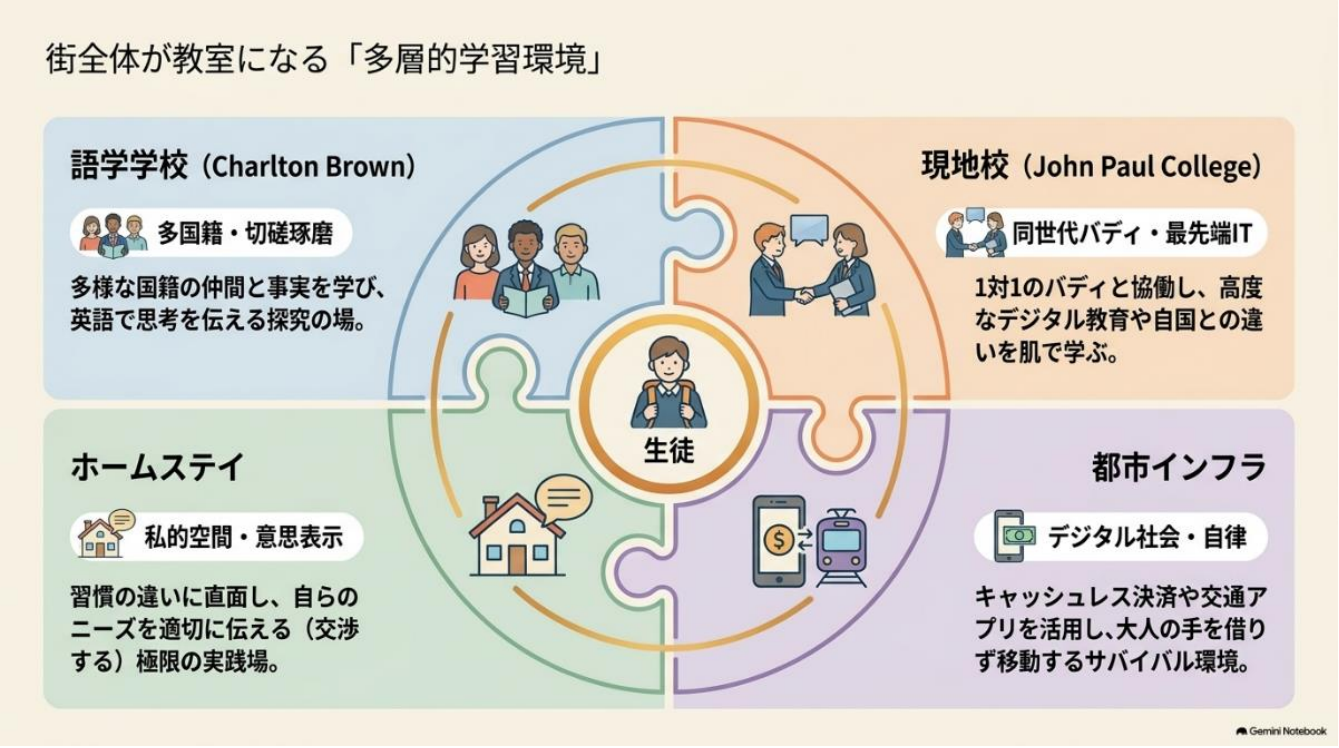
[1] エージェンシー：自分で考え、判断し、行動を切り拓く力

第２章：研修プログラムの構成と多層的学習環境

今回のプログラムは、7 月 17 日から 8 月 3 日までの 18 日間（現地ブリスベン滞在 15 日間）にわたって実施されました。生徒たちの変容を促すため、教育環境を多層的に設計し、それぞれ異なる性質の挑戦機会を提供しました。

第一の層は、英語教育において高い実績と多国籍な学習環境を提供する語学学校『チャールトン・ブラウン（Charlton Brown）』での多国籍協働学習です。世界各国（南米、アジア、ヨーロッパ等）から集まった多様な同世代と机を並べ、お互いの国の文化を教え合いながら英語を『生きたコミュニケーションツール』として活用する実践的なカリキュラムに身を置きました。

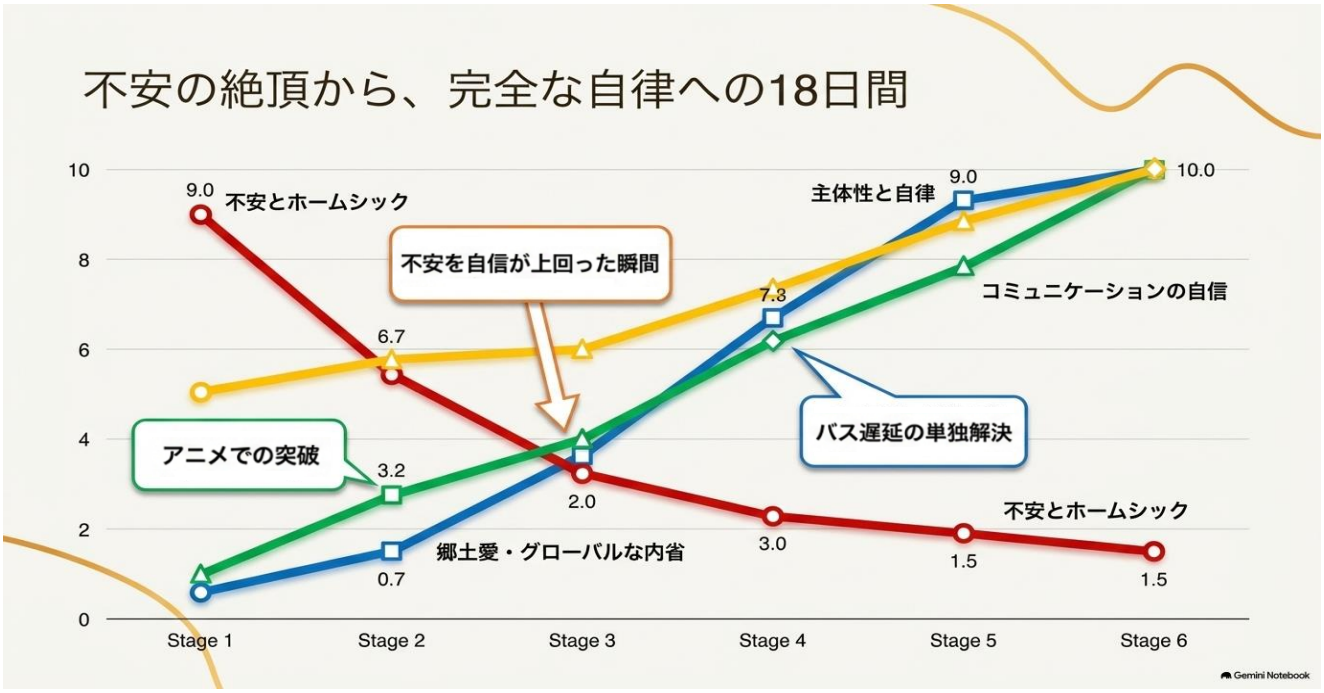
第二の層は、オーストラリア屈指の有名名門私立校である『ジョン・ポール・カレッジ（John Paul College – JPC）』への 2 回にわたる特別体験入学です。JPC は、幼稚園から高校までの一貫教育を提供し、最先端の IT・環境教育で知られるエリート校です。ここでは生徒たち全員に 1 対 1 の現地バディ（同世代のペア）をマッチングし、バディと同じ通常の授業（化学や技術など）に参加させることで、イベント的な観光交流では得られない、同世代の生徒との深く直接的な教育的交流が実現しました。



第３章：データで見る生徒の心理的変容と主体性発達のダイナミクス

本事業の教育的変容を客観的に実証するため、参加生徒たちが毎日記述したリフレクション・ジャーナル（内省日誌）の記述テキストを、教育心理学的な基準に準拠して10段階（1：極めて低い、10：極めて高い）で定量化し、時系列マッピングを行いました。

【図：18日間の生徒の心理的変容グラフ（不安指数の急落と主体性・自信の向上を示す曲線図）】



分析結果から明らかになったのは、生徒たちの内面の劇的な変化です。渡航初期（Stage 1～2）、言語障壁や未知の環境への過度の戸惑いにより、生徒の『不安・ホームシック』は『9.0』という極限値に達し、『早く島に帰りたい』と漏らす深刻な葛藤状態にありました。

しかし、デジタル交通インフラを駆使した自律登下校（Stage 3）の導入、保存された突発的なバス遅延トラブルを自力で解決した瞬間（Stage 4）を契機に、状況は劇的に変化しました。生徒たちの『主体性・自律性』は、初期の『2.0』から最高値の『10.0』へと急上昇し、それに呼応するように不安指数は最終的に『1.5』まで急落、コミュニケーションに対する『自信』は『8.0』に到達しました。このデータは、大人の『信頼と手放し』が、生徒の自己効力感（Self-Efficacy）の飛躍的な向上を実証的に引き出したことを明瞭に裏付けています。

第４章：18 日間の活動詳報（第１日～第３日）

- 旅立ちと未知なる地への到着 -

第４章では、18 日間の活動の詳細を各生徒からの活動報告を含めた内容で紹介します。

【7 月 17 日（出発式・鹿児島移動）～7 月 18 日（成田経由・渡豪）】



徳之島空港にてあたたかい応援に見守られながら出発式を実施しました。出発式の中で、参加する生徒から熱い意気込みが語られました。

鹿児島空港に到着後、鹿児島市内で一泊し、翌 18 日に羽田空港を経由して成田空港からブリスベンへ向けて飛び立ちました。

出国時、子供たちの表情には緊張と期待が入り混じっていました。

【7 月 19 日（ブリスベン到着、ホストファミリーとの対面、生活準備）】



早朝、ブリスベン空港へ到着。入国審査場（イミグレーション）は完全にデジタルトランスフォーメーション（DX）化されており、対面質問なしでパスポート読取と顔認証のみで通過できる最新のスマートゲートシステムを体験しました。税関では、事前研修での練習通りに英語で申告物を説明することができ、入国審査官から温かく入国を歓迎されました。

入国後、専用車で語学学校（チャールトン・ブラウン）のオフィスへ移動し、オリエンテーションを受けました。その後、市内を歩いて、公共交通機関に不可欠な交通系 IC カード『go card』を購入しました。その後、郊外の閑静な住宅街にある各ホームステイ先へ移動。ホストファミリーの優しい出迎えに、生徒は『まるでドラマで見た街並みのようできれい』と目を輝かせ、安心して学びに専念できる環境であることを実感しました。

第４章：18 日間の活動詳報（第４日～第５日）

– 語学学校開校と初めてのセルフオーダー –

【7 月 20 日（チャールトン・ブラウン開校、クラス分けテスト）】



朝 7 時 30 分、生徒たちはホームステイ先で引率者と合流し、最初のバス登校に挑みました。オーストラリアのバスは日本と比較し、車内アナウンスが頻繁にはないため、電子表示板とアプリでバス停を確認し下車することが必要でした。語学学校チャールトン・ブラウン到着後、オリエンテーションとクラス分けテストを受講しました。

数学のテストは問題文がすべて英語であり、単語の意味が分からなければ何を求めればよいか理解できなかったり、仮分数と帯分数の表記・扱いの違いに戸惑ったりしながらも、熱心に取り組みました。下校時に他国の生徒と自然に挨拶を交わす生徒たちの姿からは、グローバルな学びの刺激を直接受け、前向きに頑張ろうとする意欲がひしひしと伝わってきました。

【7 月 21 日（コアラサンクチュアリ見学と初の売店でのオーダー）】



バスを乗り継ぎ、ローンパインコアラサンクチュアリーを見学。フリータイムでは事前にマッチングされた現地バディと共に行動しました。パーク内では、カンガルーへの直接の餌やりやコアラの鑑賞、野生動物を取り巻く深刻な環境保護問題についての講義を真剣な表情で聴講しました。

売店では、引率者の手を一切借りず、自分だけの力で英語でオーダーし、スマート決済を行うという自律的なショッピングに挑戦し、無事に成功。スモールステップの成功体験を確実に積み上げました。帰路では、ホスト宅までのバス経路を自らアプリで検索し、進んで道を覚えようとする主体的な適応の姿勢が急速に芽生え始めました。

第４章：18 日間の活動詳報（第６日～第７日）

- 名門校 JPC 体験入学と歴史遺産の探訪 -

【7 月 22 日（現地校ジョン・ポール・カレッジ体験入学 第１回）】



この日より、登下校時の移動手段の検索と判断を完全に生徒主導へと移行。引率者は迷ったときのアドバイスのみを行いました。

午前中の学習後、名門校ジョン・ポール・カレッジ（JPC）へ移動。JPC は幼稚園から高校までの一貫教育を提供する超有名私立校です。

到着後、アジア系も含め多様な人種が共生する素晴らしい環境の中、現地生徒と１対１の同世代バディを組んで実際の授業に参加。昼食時には用意されたピザを囲み、日本の流行や趣味について談笑しました。生徒たちは昨日よりも明らかに肩の力が抜け、身振り手振りを交えながら、多文化が共存する環境を全身でエンジョイする様子が見られました。

【7 月 23 日（ブリスベン市役所ミュージアムと歴史時計台見学）】



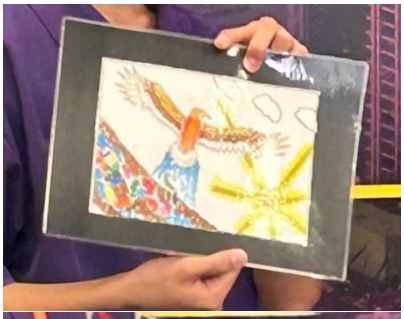
午前中の語学学習を終え、3 チームに分かれてブリスベン市役所へと向かいました。市役所内は美しい歴史的なミュージアムとなっており、英語の説明文を読み解き、展示された古い公文書や遺物を見学しました。

その後、時計台を見学。年代物の古いエレベーターに乗りながら、ガイドから時計台の歴史や機能についての丁寧な解説を聴講しました。生徒たちは、都会の美しい歴史建造物に圧倒されつつも、メモを取りながら異文化の歴史的価値に深く耳を傾けていました。見学後は語学学校へ戻り、夕方まで意欲的に英語学習を継続しました。

第４章：18 日間の活動詳報（第８日）

- アボリジニ文化の探究と郷土紹介の準備 -

【7 月 24 日（アボリジナルアート体験、在来種プレゼン準備）】





この日は語学学校でのプログラムが非常に充実していました。午前中はオーストラリアの先住民族であるアボリジニの歴史、伝統音楽、そして独自の文化について映像や体験談から深く学びました。

その後、アボリジニの伝統芸術である『ドットペインティング』に挑戦。綿棒を使い、一粒一粒の色点をキャンバスに置いて好きな模様を表現する独特の技法に生徒たちは夢中になり、楽しみながら素晴らしいオリジナルアートを完成させました。

午後からは、オーストラリアの在来種の動物（タスマニアデビルやウォンバットなど）の生態、学名、分布域を英語で調べ、来週のプレゼンテーションで使用するデジタルスライドの作成に取り組みました。

生徒たちは、『月曜日には、オーストラリアの動物紹介だけでなく、徳之島から持ってきた郷土紹介ハンドブックも使って発表する！』と意気込んでおり、自ら英語のプレゼンテーション資料を磨き上げる姿に、主体的探究学習への高い意欲が見られました。



最後は帰国する他国のクラスメイトへアボリジナルアートを手渡し、感動的なお別れ会を開きました。

第４章：18 日間の活動詳報（第９日）

- 生徒主導の市内自主研修と最初の内省 -

【7 月 25 日（プラネタリウム見学、サウスバンク・クイーンズストリート散策）】



週末は語学学校が休みのため、事前研修段階で生徒たち自身が綿密に計画したプランに基づき、公共交通機関のみを駆使した市内観光・自主研修を実施しました。

午前中は、ブリスベン川の西部に位置するサー・トーマス・ブリスベン・プラネタリウムへバスで向かい、オーストラリアの星空の科学的解説を英語で堪能しました。その後、サウスバンクにて昼食をとり、新しく架けられたサウスバンクと対岸を結ぶ最先端の歩行者専用橋『ネビル・ボーナー・ブリッジ（Neville Bonner Bridge）』を自分たちの足で渡りました。午後からはクイーンズランドの広大なショッピング街へ向かい、自らお土産を選んで購入しました。この日の生徒の活動報告には以下のような、深い自己分析と異文化比較の内省が記されました。



『ブリスベンは冬でも太陽が近くて日差しが恐ろしく強く、日焼けをしました。地球温暖化の深刻な影響を感じます。また、美しいはずのブリスベン川が実際は緑色に汚れており、日本の川や、徳之島の透明な海がきれいに保たれていることは、当たり前のことではなく、島の人々の努力による奇跡的なものなのだと気づかされました。』

『都会でパトカーが夜通し走り、路上にポイ捨てやガムが散乱しているのを見て、鍵をかけずに誰もが見守り合って暮らせる徳之島の道徳的な良さ、安全さを再発見できました。』

第４章：18 日間の活動詳報（第 10 日）

- ゴールドコースト長距離移動と本場のテーマパーク -

【7 月 26 日（ムービーワールド観光、初めての電車移動）】



日曜日は、ブリスベンからさらに遠方のゴールドコーストへ、片道 2 時間以上かけて公共交通機関（バスと電車）を乗り継ぐ長距離移動に挑みました。オーストラリアでの初の電車移動であり、生徒は『日本の電車の券売機や改札の仕組みとほとんど差異がなく、スムーズに対応できた』とデジタルインフラの共通性を学びました。

ワーナー・ブラザーズ・ムービーワールド到着後は、『絶叫組』と『のんびり散策組』に分かれて行動しました。絶叫組は、高さ 61m から時速 115 キロで急降下する南半球最大級の絶叫ジェットコースター『DC Rivals HyperCoaster』に挑戦し、本場ならではのスケールに大興奮しました。

のんびり散策組は、テーマパークのサービス設計やフード（チュロスや綿あめ）を堪能しながら散策。生徒の活動報告には、『日本のテーマパークは世界観のクオリティや細部の演出が優れているが、オーストラリアの施設は混雑が少なく並ぶ時間が極端に短いため、ストレスフリーで遊びたい人にとっては合理的。それぞれに国ごとのシステムの特徴がある』という、自身の体験に基づいた多角的な比較分析が記録されていました。

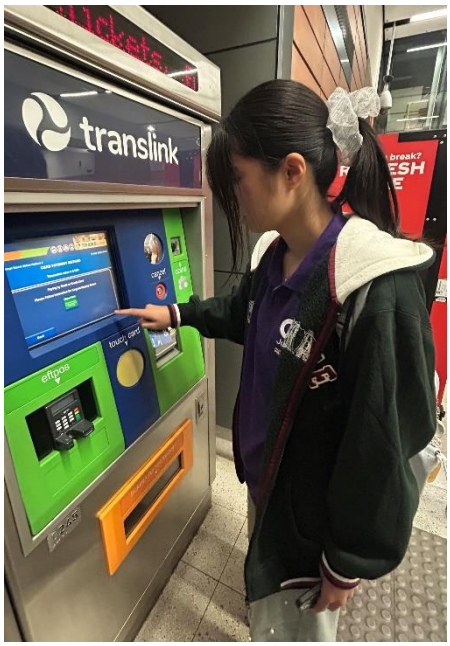


最後は全員でスーパーヒーローたちが登場する豪華なパレードを鑑賞し、最高の思い出の一日となりました。

第４章：18 日間の活動詳報（第 11 日）

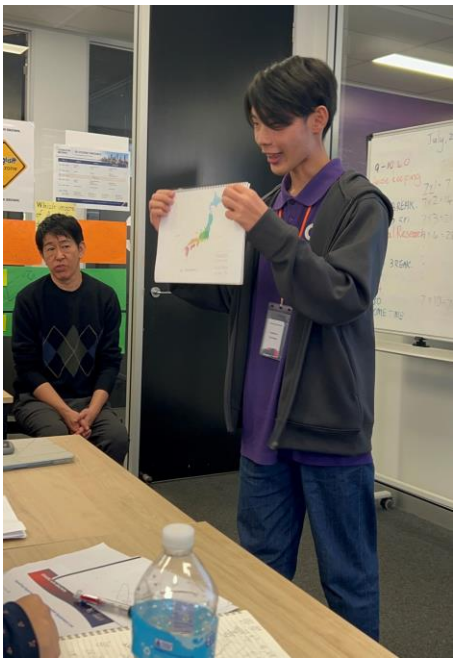
– バス大幅遅延トラブルの自律解決と英語プレゼン –

【7 月 27 日（女子班のバス遅延トラブル、動物プレゼンテーションの実施）】



この日の朝、プログラム史上最大の危機と、それに対する生徒たちの劇的な『エージェンシー[1]の覚醒』が見られました。

女子生徒のチームは、利用予定だった公共バスが道路交通事情により大幅に遅延。このまま待てば始業時刻に完全に遅刻してしまうという突発的なトラブルに遭遇しました。しかし彼女たちは引率者を頼り指示を仰ぐという受動的な解決ではなく、自律的にリアルタイムナビゲーションアプリ『Translink』を操作。地図上で他のバスの運行状況とリアルタイムの現在地を確認し、最寄りの別のバス停から代替の経路を発見して速やかに移動を決定。見事に始業前に到着することができました。この出来事は、デジタル技術を『生きる武器』として完璧に使いこなしトラブルに対応できたという高い自己効力感を生徒たちに定着させました。



午後からは、これまで準備してきたオーストラリアの生態系についてのデジタルスライドプレゼンテーションを、他国の多くの級友が見守る中で堂々と発表しました。

緊張した様子を見せていたものの、3 名の生徒全員が最後までやり遂げ、さらには特別に時間を設定していただき、事前に準備した手作りの『徳之島紹介ハンドブック』を用いた特別発表を実施。徳之島の無類の自然環境や伝統文化を紹介し、多国籍の聴衆から大喝采を浴びました。

第４章：18 日間の活動詳報（第 12 日）

- 恐怖から大歓喜へ！ブリスベン川カヤック体験 -

【7 月 28 日（ブリスベン川一人乗りカヤック、放課後の国際交流）】



この日の午後、市内中心部を流れる雄大なブリスベン川にて、一人乗りカヤックの体験アクティビティが実施されました。渡航前から、生徒たちの多くは『冬に川に入るなんて嫌だ』『私は泳げないから、ひっくり返って落ちたらどうしよう、怖い』という強い恐怖感と拒絶を示し、活動に対して完全に後ろ向きでした。

「Horizontal line of safety first, but then challenge took over!（安全第一ですが、次第にチャレンジ精神が勝ります！）」現地インストラクターの丁寧な技術指導と、先んじて楽しそうに川に漕ぎ出す海外のクラスメイトの楽しそうな様子に鼓舞され、勇気を出して一人乗りのカヤックへ乗り出しました。すると、数分もしないうちにパドル操作のコツを掴み、自在に川の上を操縦できるようになり、全員が笑顔で漕ぎ回りました。



生徒の活動報告には、『恐怖心はジェットコースターのように強かったが、実際挑戦してみたら不安なんて完全に吹き飛ぶくらい最高に楽しかった！ 恐れや先入観はやってみることで克服できることを学んだ。川の水を顔に浴びたとき、水がしょっぱくて汽水域だと気づいて驚いた』とあり、限界を自ら突破した『成功体験』が感動的に記録されていました。

放課後は、多国籍の友人たちに誘われてカフェ（yo-chi）へ行き、好きなトッピングを自分で選ぶヨーグルトアイスを食べながら、満面の笑みで英語でのフリートークと国際交流を深めました。

第４章：18 日間の活動詳報（第 13 日）

- 現地エリート校化学実験と技術・文化差異の分析 -

【7 月 29 日（ジョン・ポール・カレッジ体験入学 第 2 回、ゲームを通じた交流）】

この日は、名門私立校ジョン・ポール・カレッジ（JPC）での 2 回目の登校日であり、バディの生徒たちと過ごす最後の活動日となりました。



留学生全員での協力クリエーションゲームを行った後、オーストラリアの伝統的なお菓子『フェアリーブレッド』を自作して食べる文化体験を満喫。その後、バディの授業に完全に参加しました。



女子生徒は化学の通常授業に参加し、そこで日本の教育環境との差異を発見しました。これまでに体験した授業では、物質を温める際にガスバーナーを使用していましたが、JPC では全てデジタル表示・制御の最先端加熱機械が使用されていました。また、化学実験の際には、安全管理として全員が白衣とゴーグルを完全着用するルールが徹底されていることや、一方で実験の自由度が高いことなどを冷静に比較分析しました。

男子生徒は技術の授業で、世界的人気ゲームソフト『大乱闘スマッシュブラザーズ』を用いたユニークな協働授業に参加。ゲーム内での KO 回数や敗退回数を数学的にデジタル記録・統計化する、日本の常識とは大きく異なる実践的な教育手法に驚愕しました。

JPC でのプログラム終了後、語学学校にバスにて移動し解散。放課後は語学学校の友人たちと学校近くのカフェに寄り、二度目の放課後の国際交流を楽しみ、最高の思い出を作りました。

第４章：18 日間の活動詳報（第 14 日）

– 州立科学博物館ミッションと多国間言語交換 –

【7 月 30 日（クイーンズランド博物館見学、タスマニアデビルの学び）】

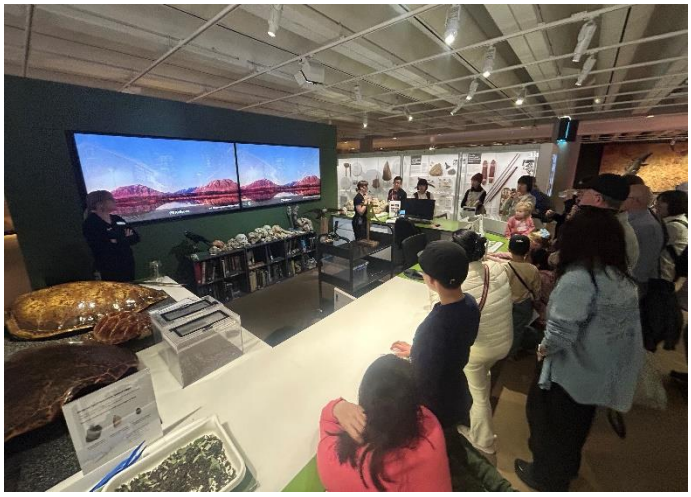
サウスバンクに位置する州立『クイーンズランド博物館』を見学。同館は 1,500 万点以上の歴史・科学・文化の膨大な標本を誇る最高峰の科学施設です。



午前中のクラスでは、お互いの母国の固有種や有名な動物について英語でプレゼンし合い、タスマニアデビルの絶滅危機や生態系崩壊問題について予備学習を行いました。

午後から博物館へ移動し、係員から与えられたミッション（説明文を読み、海岸沿いや森林など異なる生息エリアの生き物を探し出すタスクなど）に多国籍な友人たちとグループを組み、協力して挑戦しました。

館内に展示された実寸大の恐竜の化石や、精巧なカンガルー、ウォンバットの剥製に大いに圧倒されつつも、お互いに手元のアクティビティシートを埋めるため英語でヒントを出し合いました。



昼食休憩中には、併設のカフェでお互いの国の言葉（中国語、韓国語、台湾の言葉、日本語、そして徳之島の言葉）での『ありがとう』や挨拶を教え合い、自分の住む地域の写真をスマホで見せ合うなど、極めて自然で主体的な多文化共生の交流が、終日笑顔の中で展開されました。

第４章：18 日間の活動詳報（第 15 日～第 18 日）

- 涙の卒業セレモニーと帰国の途 -

【7 月 31 日（語学学校最終日、涙の卒業セレモニー）】



チャールトン・ブラウン最終日。午前中、これまで発表をしていなかった生徒も緊張に打ち勝ち、デジタルスライドを用いて徳之島の観光・豊かな自然を英語で堂々とプレゼンテーションし、大拍手を浴びました。

午後からは卒業セレモニーが開催され、校長先生より一人一人に卒業証書と記念のオリジナルマグカップが授与されました。式が終了した瞬間、教室は涙で包まれました。たった2週間前、環境の変化に戸惑い『早く徳之島へ帰りたい』と落ち込んだ場面もありましたが、最終日は、他国の友人や現地講師との別れが寂しくて、お互いに抱き合い、号泣しながら写真を撮り合い、いつまでも名残を惜しんでいました。『国籍や言語が違っても、こんなに短い時間で心から涙を流してハグできる親友になれるなんて想像もしていなかった。出会いは当たり前ではなく、一瞬で過ぎ去るからこそ貴重なのだ』と、生徒はかつてない人間愛を体感しました。





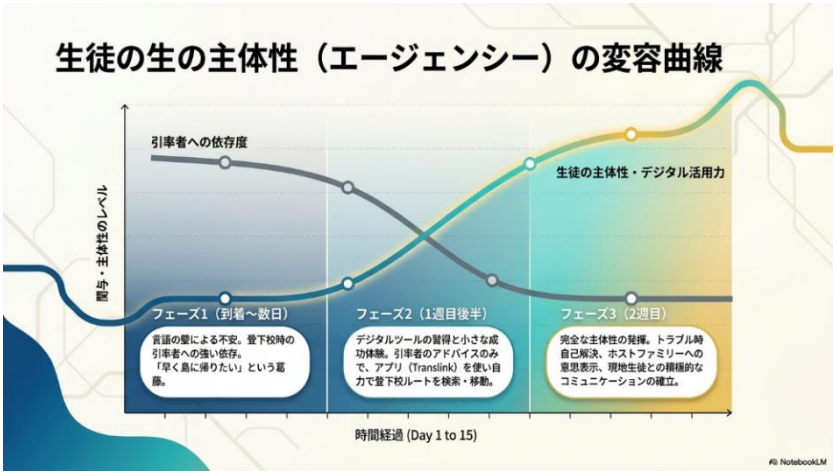


【8 月 1 日～8 月 3 日（ホストファミリー別れ、帰国・解散式）】

8 月 1 日は終日、ホストファミリーとの最後の大切な感謝の時間。2 日にブリスベン空港を涙で出発し、成田経由で 3 日に徳之島空港へ帰還しました。到着後の解散式で見せた生徒たちの表情は、出発前とは見違えるほど凛々しく、揺るぎない自信に満ち溢れた、たくましい次世代のリーダーそのものでした。

第５章：エージェンシー（主体性）の覚醒と自己効力感の変容分析

18 日間のプログラムがもたらした生徒のエージェンシー[1]の覚醒は、教育的指導の工夫とデジタル交通インフラの活用、そして生活交渉という『三つの手立て』が見事に調和した結果であると考えられます。教育学的な視点から、その変容の要因を多角的に分析します。



第一は、『完璧な英語への拘りの排除とコミュニケーション・レジリエンス[2]の獲得』です。渡航初期の、言葉が出ない戸惑いを打破したのは、スマホでの日本のアニメ画像を活用した戦略的自己開示でした。言葉が不完全であっても、翻訳ツールの誤訳すらコミュニケーションの笑いに昇華させ、相手を思いやる『非言語・準言語手段』を自発的に実践したことは、カール・ロジャーズが提唱した三原則（『The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change（1957)』）とも深く符合します。

第二は、『ホームステイにおけるアサーティブ・コミュニケーション[3]による自立の獲得』です。洗濯の回数制限による衣服不足や、辛い・苦手な食事が何度も出された際、日本人にありがちな『黙って我慢する（過剰な同調の察し文化）』から脱却し、勇気を出して『明日、洗濯機を使ってもいいですか？』『辛すぎて食べられないので、残してもいいですか？』と相手に明確かつ誠実に伝える交渉を実践しました。この経験は、国際社会を対等な個人として自立的に生きる上での決定的なコミュニケーション能力（意思表示力）の体得となりました。

第三は、『アプリ（Translink）による問題解決学習の確立』です。音声アナウンスが不十分なオーストラリアの公共バスで、リアルタイムで遅延を把握し、自力で代替経路を選択した成功体験は、アルバート・バンデューラの自己効力感理論（『Self-efficacy（1977)』）における『直接体験（Enactive Mastery Experience）』そのものであり、自らの判断で未知の社会に適応できるという自立心を育みました。

---

[2] コミュニケーション・レジリエンス：人間関係の摩擦などの困難に直面したとき、しなやかに立ち直り関係を再構築する力

[3] アサーティブ・コミュニケーション：相手を大切にしながら、自分の意見や困りごとを丁寧に伝える力

第６章：直接体験による「郷土愛（ローカル・アイデンティティ）」の逆照射

本事業のもたらしたもう一つの重要な、そして予測を超える素晴らしい教育効果は、異国ブリスベンという先進都市に直接身を置いたことで、生徒たちの心に強固な『郷土・徳之島に対する誇りと再価値化（ローカル・アイデンティティ）』が、メタ認知を通じて逆照射[4]されたという事実です。



デヴィッド・コルブが提唱する『経験学習モデル（1984）』における（具体的経験 → 反省的内省 → 抽象的概念化 → 能動的試行）のサイクルに沿って、生徒たちが得た具体的な体験や経験を紐解くと、以下のような高度な地域価値の再定義するプロセスが見て取れます。

① 『自然環境保全の対比』：世界有数の美しさを誇るリバーシティ・ブリスベンに身を置きつつ、目の前の巨大なブリスベン川が常に緑色に濁り、海の匂いを放っていることに直面した生徒は、徳之島のどこまでも透明な海や、豊かな清流が、決して『当たり前に存在するもの』ではなく、島の人々の不断の環境維持活動によって奇跡的に保たれている『かけがえのない宝物』であると、初めて気づきました。

② 『治安と高い公共モラルの尊さ』：最先端の快適な都市部を享受する一方で、夜間に常に遠くで鳴り響くパトカーのサイレンや、警察による路上職務質問の多さ、飾られた美しい並木道であってもポイ捨てゴミやガムが散乱しているストリートの現実に直面しました。これにより、島中に鍵をかけずに子供たちが安全に遊ぶことができ、お互いの顔を見ながらあたたかく見守り合う徳之島の『圧倒的な社会の安全性と公共道徳心の高さ』を誇らしく再定義しました。

外の広大な世界を知ったことで、初めて自分の原郷（徳之島）の価値を客観的かつ強固に肯定するという、グローバル時代を生きるうえで重要となる多元的な愛郷心が形成されたのです。

---

[4] メタ認知を通じた逆照射：外の世界（都会）を体験することで、鑑のように徳之島の本当の良さを見つめ直すこと

第７章：次世代リーダーを育成するグローバル教育モデル

今回の語学留学では、『次世代リーダーを育成するグローバル教育』の基本モデルを提案しました。

生徒を信頼し、『主体性を促す』指導体制を確立したことにより、子どもたちが自ら世界を渡り歩き、自らの原点である郷土徳之島を愛する主体的な次世代のリーダーへと成長を遂げるための、確かな道筋を実証することができました。

プログラムを終えた生徒たちの胸には、もはや離島という環境への諦めや地理的制約は存在しません。彼らは『将来は海外の日本人学校で働くのもいい』『もっと言語や多様な文化を学び続けて、世界に大きく羽ばたき、大好きな徳之島のために貢献したい』と、力強いキャリア意識を抱いています。彼らの今後の成長と活躍が楽しみでなりません。

最後に、この『徳之島町海外語学留学』は、ふるさと納税をいかに有効活用するかという重点のもと、徳之島の未来への投資となる教育的アプローチとして洗練させたものです。地理的制約に悩む全国の地方自治体にとって、再現性の高い持続可能なグローバル人材育成パッケージとなることを強く宣言します。

